

2021 年度 チャイルドライン OSAKA 年次報告書



I	チャイルドライン OSAKA 概要	1 ページ
II	電話のデータ	2 ページ
III	2021 年度をふりかえって	
	データから見える子どもの姿	5 ページ
	子どもたちの厳しい現状	6 ページ
	今、チャイルドラインにできること	7 ページ

I チャイルドライン OSAKA 概要

1. 事業の開始 2001 年 1 月より常設
2. 事業目的 子どもたちが気持ちを聴いてくれる人に会い、安心して話せる電話としてチャイルドラインを開設し「子どもの意見表明」の場を確保します。
カード・ポスター・インターネットなどを通じ、チャイルドラインの広報をすることで、子ども・子どもにかかわるおとな・社会へ、子どもが意見表明することの大切さを伝えます。
3. 実施内容 18 歳までの子どもの専用電話「チャイルドライン」の開設
全国統一フリーダイヤル(0120-99-7777)で子どもたちの声を聴く
毎週金曜日 16 時～21 時チャイルドライン開設

日曜スポットチャイルドライン開設 8 回
世界こどもの日(11/20、子ども権利条約採択日)を中心に「32 時間ずっとつながるキャンペーン」実施
8 月～9 月 Zoom で養成講座、実践講座を実施し 5 名が新スタッフとして活動開始
ロート製薬株式会社 従業員寄付団体「かるがも基金」より寄付金受領
(2022 年度のカード配布で使用)
大阪市ボランティア活動振興基金より助成金交付
厚労省新型コロナウイルス対策費用の補助金受給
大阪市港区社会福祉協議会よりコロナ禍での活動を応援する助成金交付
定例会 6 回
エリア研修(1/23) 講師 松本俊彦氏
「自傷・自殺する子どもたち」
現任研修(2/27) 講師 佐藤まどか氏
「自死遺児であった子ども時代を経て」
全国研修(3/19) 講師 金子由美子氏
「コロナ禍で顕在化した子どもの生きづらさ」

チャイルドライン支援センター総会、参加
大阪連絡会、近畿北陸エリア会議、参加
2020 年度年次報告書作成

4. 広報活動

＜キャンペーン用カード配布＞ 大阪市立中学校、中学生全員へ配布

＜キャンペーン用チラシ＞大阪市立中学校各教室へ提示

＜ポスター配布＞ 大阪市立中学校へ配布

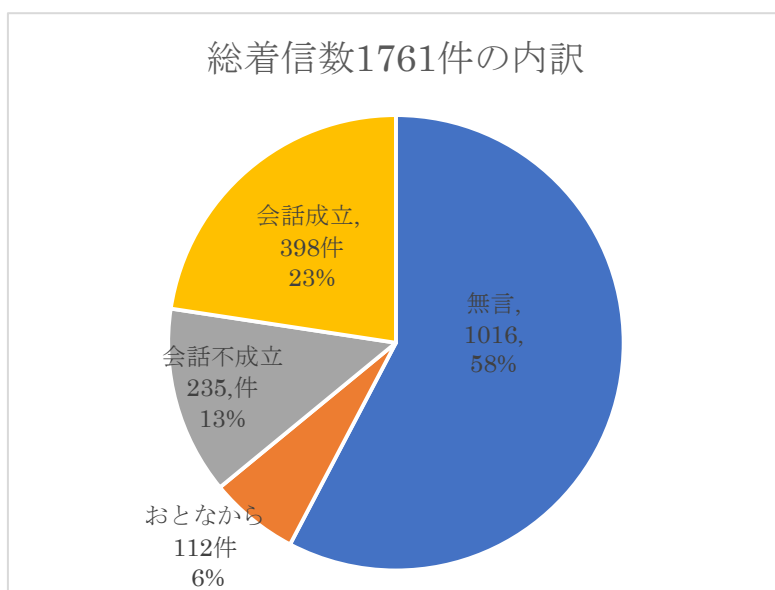
大阪府下の府立高校、私立小・中・高校へポスター配布（大阪連絡会としての取り組み）

2021 年度に配布したチャイルドラインカード

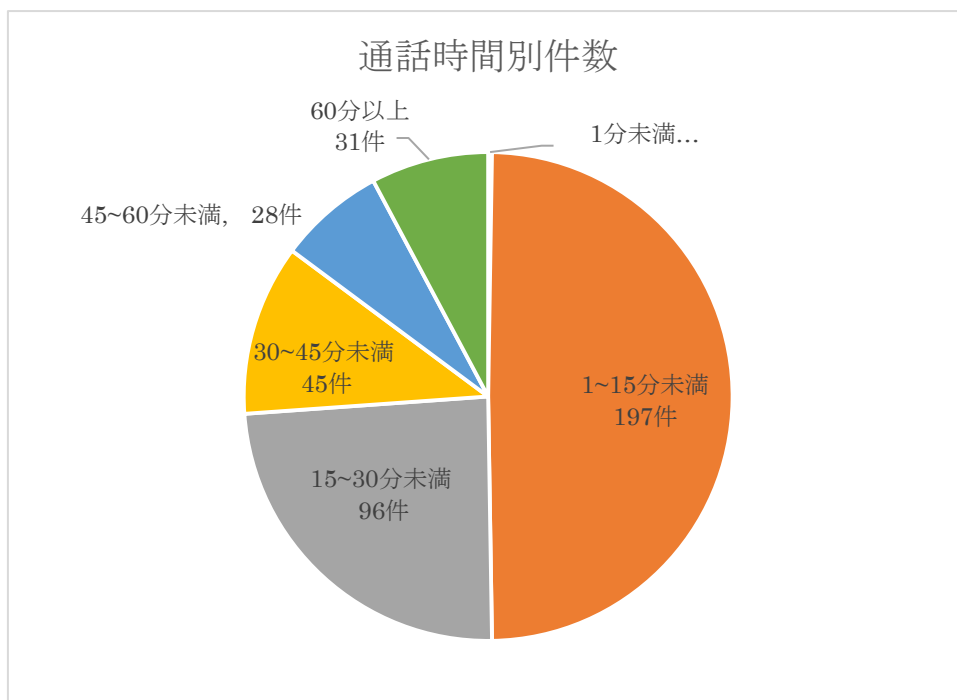
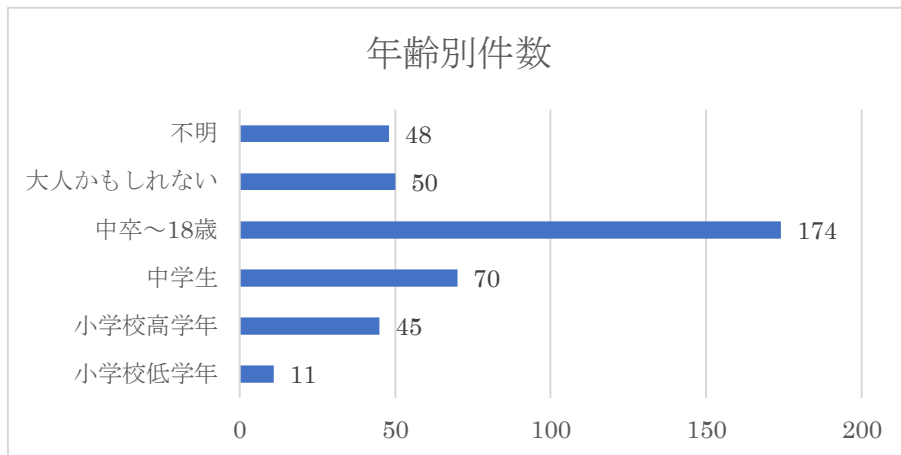


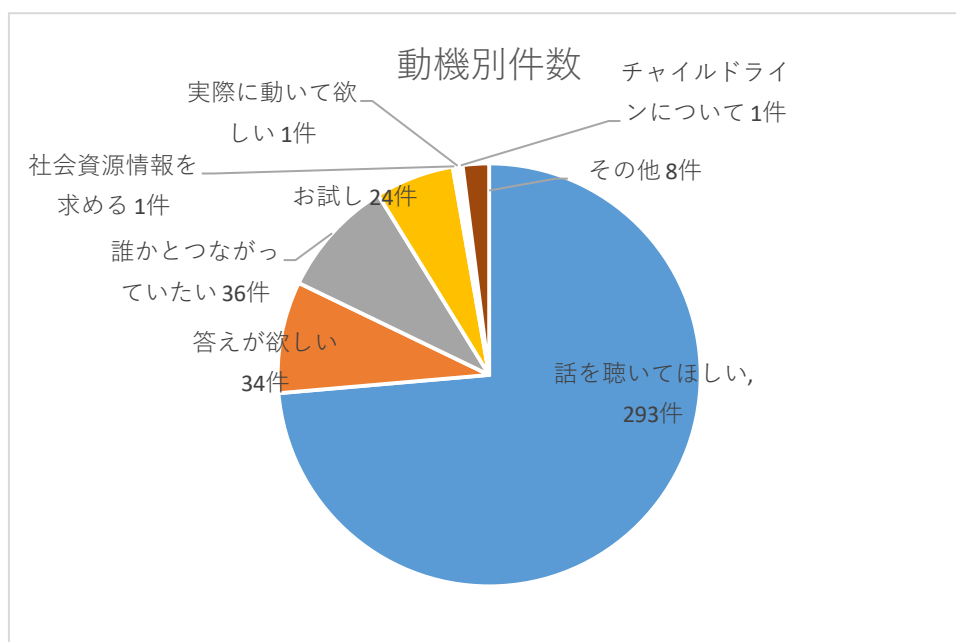
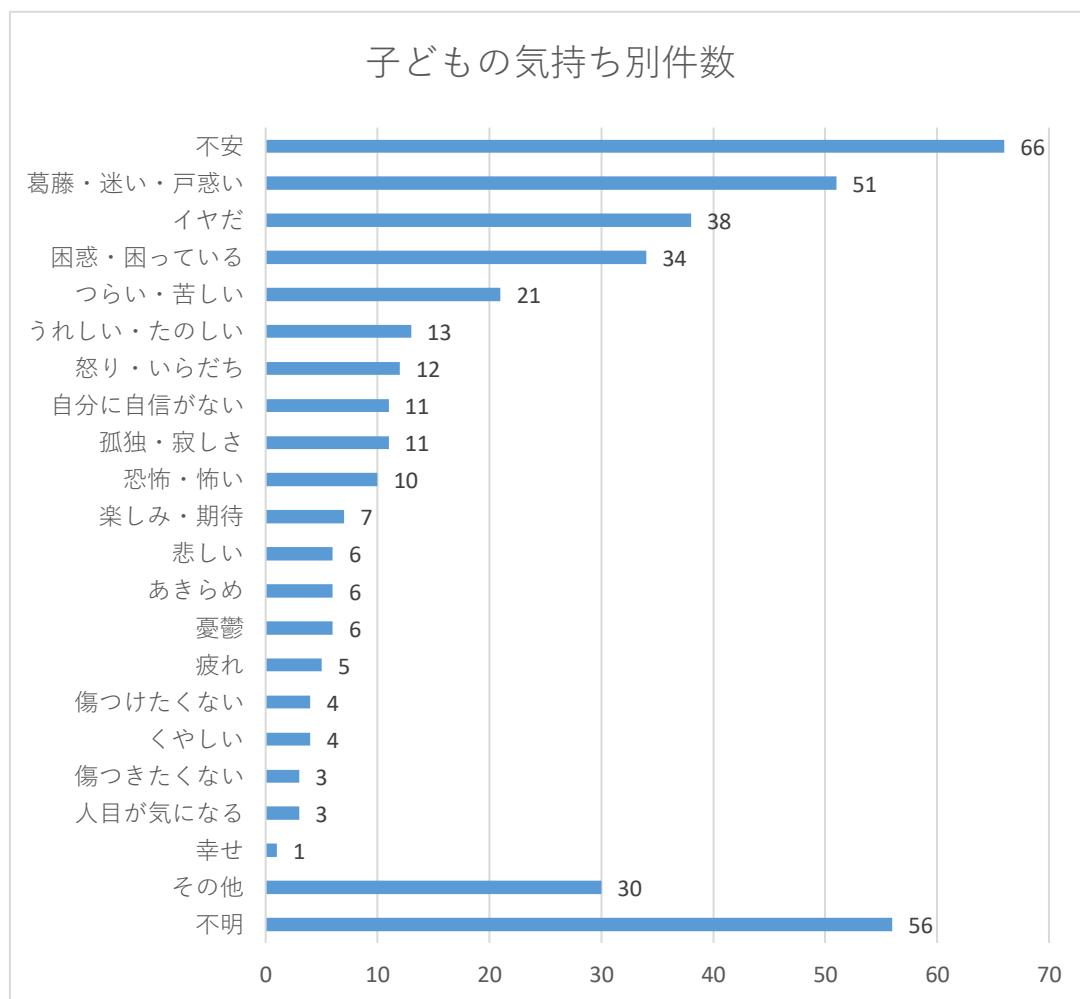
Ⅱ 電話のデータ

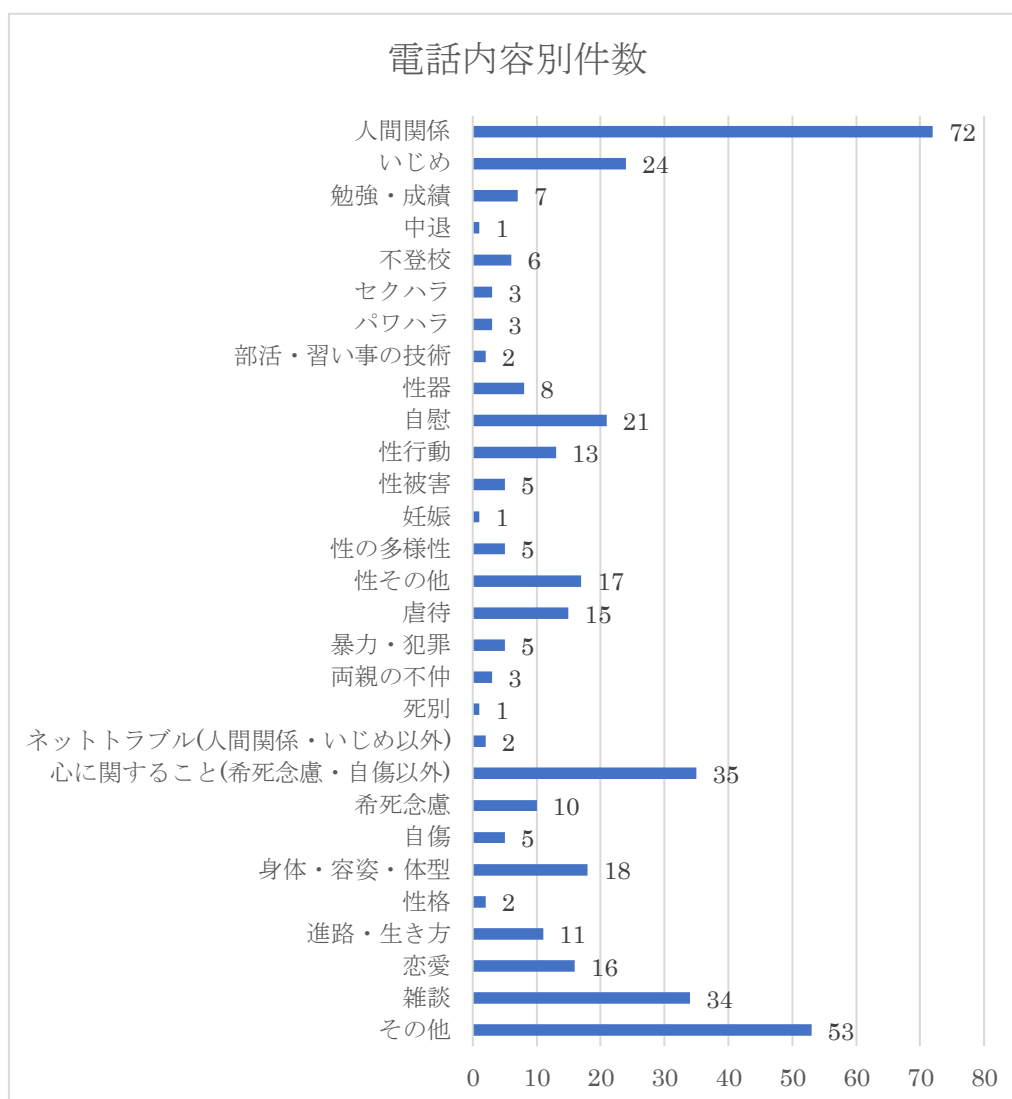
2021 年度は 58 日チャイルドラインを開設し、1761 件の電話を受けました。



会話成立した 398 件の内訳







Ⅲ 2021 年度をふりかえって

データから見える子どもの姿

ここ数年、チャイルドラインにかかってくる電話は件数の増減はあるものの、会話成立率、動機、電話内容などに大きな変化はない。

コロナ禍の生活も 2 年目になり、子どもたちも当初の戸惑いや不安の気持ちを訴える電話から、より日常の話題に少しずつ移行してきたが、中には、おとなへの怒りやあきらめなど無力感を語る電話もあった。また、コロナ前にみられた複数の子どもが同じ電話機を共有してお試しでかけてくる光景は「密」な行為になるからか、コロナをきっかけにみられなくなってしまったように思う。

実社会ではおとなも子どもも電話離れが進み、顔の見えないだれかに話をする行為そのもののハードルが上がっている。データでは無言の割合が年々増えている。電話をかけてはみたものの何を話すのかとまどい、最初の声に驚いて電話を切ってしまうようなこともあるのかもしれない。それでも、通話時間に注目してみると 60 分以上の長い電話が以前より増えている。電話で話すことの心地よさを知っている子どもや、自分の話を聴いてくれる場としてうまく利用している子どもにとっては「チャイルドラインで話す」という行為は日常生活の中に自然に溶け込んでいるのかもしれない。

子どもの気持ち (%) の変化 (2017~2021)																							
	不安	葛藤	イヤだ	困惑	つらい	うれしい	怒り	自分に自信がない	孤独	怖い	楽しみ	悲しい	あきらめ	憂鬱	疲れ	聞けたくない	くやしい	聞きたくない	人目が気になる	幸せ	満足	その他	不明
2017	15.9	9.4	11.2	10.3	9.2	6.2	1.6	1.8	3.1	1.8	1.1	3.6	1.1	1.3	0.9	0.7	2.2	1.1	1.8	0.4	0.1	5.6	8.5
2018	15.1	6.9	10.3	11.6	9.0	6.2	3.2	2.1	1.3	2.3	1.5	2.4	0.6	1.1	2.8	0.3	0.3	0.8	1.5	0.2	0	5.4	15.0
2019	18.8	7.7	10.9	9.9	6.9	6.0	4.3	0	1.1	2.1	1.1	1.9	1.3	1.9	1.1	0.4	1.1	0.2	1.1	0.4	1.3	4.3	15.0
2020	16.8	8.9	10.2	12.5	3.1	3.8	3.8	1.5	3.6	2.3	2.0	2.6	0.5	2.3	2.3	0.5	1.3	0.3	0.5	0.3	0.8	7.4	12.8
2021	16.6	12.8	9.4	8.5	5.2	3.3	3.1	2.8	2.8	2.5	1.8	1.5	1.5	1.5	1.3	1.0	1.0	0.8	0.8	0.3	0	7.5	14.1
(別表 1)																							

電話の中で発した子どもの気持ちについても、概ね例年と変わらない印象がある。別表 1 は 5 年間（2017～2021 年）で割合の変化をみたものである。多くの子どもがコロナの前後でそれほど変わらず、不安や困りごと、イヤな気持ちについてだれかに話を聴いてもらいたいと思い、チャイルドラインを利用していることがよくわかる。割合としては少なくなるが、「うれしい」気持ちでかけてきた子どもの割合が減少しており、2017 年に 6.2% だったが 2021 年は 3.3% と半減している。このデータだけでいい切ることはできないし、チャイルドラインにかけなくても、日常で友だちや家族、先生などに話をしているのかもしれないが、「何を話してもいい」電話であるチャイルドラインを「困ったときにかける電話」と認識しているおとなが多くいるため、子どもたちにも「相談先」として紹介しているのではないかと思われる。実際、第一声に「相談ですが・・・」と言う子どもも多い。

子どもが「相談」という言葉を使っている、アドバイスや回答をせず、子どもの気持ちを大切にいっしょに考えるのが、チャイルドラインの姿勢である。おとなへの広報でも今一度この姿勢を伝え直す必要があるのかもしれない。先に挙げた無言やお試し、いたずら電話もだが、どんなアクションでも子どもの意見表明として受けとめるチャイルドラインでありたいと思う。

子どもたちの厳しい現状

2022 年 3 月 15 日、厚生労働省が 2021 年における自殺者数のデータを公表した。小中高生の自殺は過去最多だった 2020 年より減少したものの、過去 2 番目の多さであり、高止まりの状態が続いている。2021 年の出生数は、前年（2020 年）の 84 万 835 人より 2 万 9,213 人減の 81 万 1,622 人。1899 年の調査開始以来、過去最少を更新した。

(2022 年 9 月 16 日発表 厚生労働省 2021 年(令和 3 年)の人口動態統計(確定数)より)

少子化が止まらない現状で、子どもの声がより小さくなり、さらに生きにくい社会になっているのではないだろうか。コロナ禍は奇しくも GIGA スクール構想、子ども一人ひとりにタブレット配布を進めた。生徒と先生のつながりができ、よりきめ細かな指導を期待したいところだ。オンライン授業もなじんできたなか、子どもたちはネット社会にも順応が早く、SNS を使って自分らしい表現を身につけ、バーチャルな世界を自由に闊歩しているようにも見える。言葉だけでなく写真や映像で自分を表現し、コミュニケーションできる彼らはまさしくインターナショナルな世界に飛び立つ力を持っているといえるだろう。

一方、それでも孤独に耐えきれず、群れたい衝動で知らない人ともつながりを求める姿があった。2021 年は社会現象ともなった「グリ下、トー横キッズ」などと言われる集団に属している子どもの問題が散見した。「居場所がない」という共通ワードで集う彼らはおとなの目には奇妙に見えるかもしれない。ネット上では以前から存在していた見知らぬ人との交流、それが可視化される際に、より「わたしを見て!」という思いからの地雷系メイクであったり、意味深なストーリー投稿であったりするのではないかと思う。

「自分をわかってくれる人なんていない」…チャイルドラインの中でも時々聴かれる子どもの声である。わかりやすいワード(#グリ下界限、#地雷系)を使い、恐る恐る人とのつながりを模索し、もしそれが破綻しても「そもそも#地雷系だし・・・」とあきらめが早い。彼らにとって実社会は武装しないと生きていけないほどに厳しいのだと思われる。

今、チャイルドラインにできること

チャイルドラインでは、フリーダイヤル以外にもチャットや「つぶやく(*チャイルドライン支援センターHP 参照)」でも子どもの声を受けとめている(現在、チャイルドライン OSAKA ではフリーダイヤル実施のみ)。フリーダイヤル開始直後はひっきりなしにかかっていた電話も、かからない時間があるなど時代の変化を感じる場面がある。一方、チャットは常に対応待ちで十分に子どもの声を受けとめ切れていないと報告を受けており、コロナ禍に緊急事態宣言発令のため電話回線確保が難しくなった際に、子どもの声を受けとめる受け皿として始めた「つぶやく」の方は、かなりの子どもが書き込んでいると聞く。「チャイルドライン」自体が子どもの声を受け止める場所として認知されてきている手応えは感じられる。先に書いたように、電話のハードルが高い子どもがチャットでやり取りするなかで安心できる場とわかり、電話をかけてくることもあると聞く。初めて話す相手に自分の気持ちをすぐに話せるかということ、おとなでもなかなか難しいのではないかと思う。それでも、子どもからのアクセスがあることを真摯に受けとめ、1 本の電話にきちんと向き合う姿勢で臨みたいと思う。

次年度には電話回線を使わずつながれるツールとして「ネットでんわ」の試行に取り組んでいく予定である。より多くの子どもにとってアクセスしやすいチャイルドラインをめざしていきたい。

また、チャイルドラインだけでなく、実社会でも子どもの声にじっくりと耳を傾け、子どもの主体性を奪わずに伴走できるおとなを増やしていければと願っている。そのためにも、これまで積み上げてきたチャイルドラインの「聴く」姿勢を伝えていくことを並行して取り組んでいきたい

2021 年度 チャイルドライン OSAKA 年次報告書



編集発行 公益社団法人 子ども情報研究センター

〒 552-0001

大阪市港区波除 4-1-37 HRC ビル 5 階

TEL 06-4708-7087 FAX 06-4394-8501

HP <http://www.kojoken.jp/>